転生して最強のVTuberになる...なりたい

Natsuo

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中吉悠哉は女の子を助けて死んでしまう。しかしＶＴｕｂｅｒが好きな神様がＶＴｕｂｅｒになって欲しいということで主人公を転生させる。そして女の子に転生した主人公のＶＴｕｂｅｒ生活が始まる……

※最初は主人公がＶＴｕｂｅｒの動画を見てＶＴｕｂｅｒのことについて学ぶところから始まります。

目次

登場人物 ―― 1
プロローグ
第2話 ―― 5
始まり
転生 ―― 9
先輩!? ―― 13
笑顔 ―― 17
これが伝説の始まり・・・だといいな 20

登場人物

この世界

ＬＧＢＴ差別とかが無く、同性婚は普通。　政府が結構有能で主人公が生きている内は戦争が起きない。　また資格さえ取れれば何歳でも就職できて、２４歳くらいのニートのお姉さんが、７歳くらいの就職しているショタに養われているとかがよくある。

四季（しき）　夏咲（なつみ）

この作品の主人公で元中吉悠哉。　どんな声でも出せるから昔弟妹に漫画の読み聞かせをしてドン引きさせた。

容姿

身長は１６２ｃｍくらいで、髪型はショートで胸はＤくらいあるが邪魔なので晒しを巻いていて、顔がイケメン寄りなのも相まって服装次第では男にもみえる。　そして先輩から貰った時計をいつも腕に着けている。

性格

転生前とあまり変わってなくて、心優しく困っている人がいたら真っ先に助けに行くが、結構天然。　ここぞという場面ではとても男らしくなる。

東雲（しののめ）　響子（きょうこ）

夏咲の中学からの親友。　クラスメイトに話しかけられると5秒くらい硬直する。

容姿

身長は１５４ｃｍくらいで、髪型は三つ編みで胸はＦくらいあり、眼鏡をかけていて目が悪い。　そして夏咲が小さい頃くれたヘアピンをよく着けている。

性格

博識で頭が良いが、コミュ障で学校では夏咲以外と話せない。　テストではいつも夏咲に負けていて、勝手にライバル視している。

夏咲が好きで他のクラスメイトの名前は覚えてない

十鳥（とっとり）　結心（ゆうと）

夏咲の後輩。　実家がお金持ちでお父さんは結構有名なところの社長。

容姿

身長は１８３ｃｍと高身長。　髪型は束感ショートで、顔がイケメンでよくスカウトされる。　学校でファンクラブもある。

性格

ずる賢く校則をよく破る。しかし女嫌いで手芸部以外の女子から話しかけられると、一瞬でその場から消えるという謎スキルを持っている。結構ユーモアがあり男子人気

も高い。

天巻（てんまき）　歌凛（かりん）

夏咲の後輩。　語尾にツスとついている。スマホを持ってないせいで、手芸部が休みでも来る。

容姿

身長は１７３ｃｍで少し高め。　髪はロングで、顔はＴｈｅ日本人の美女みたいな美しさがあり、学校１和室が似合う女。

性格

曲がったことが嫌いで結心とは犬猿の仲。　しかし最近のこと日は疎くて、夏咲の家に行っては漫画や動画、テレビなどを見て知識を蓄えている。　親とはあまり上手くいっていない。

花菜時音（かさいしおん）

夏咲の先輩。　なんでも出来る（当社比）　夏咲と響子は中２からの仲。

容姿

身長は１６７ｃｍ。　髪型はポニーテールで、顔は常に笑顔。　肌は傷一つない綺麗な肌。

性格

とても元気で、運動神経抜群。よく後輩２人の喧嘩を止めていて、人を笑顔にする力を持っている。

プロローグ
第2話

僕の名前は、中吉悠哉(なかよしゆうや)

早速で悪いけど、みんなは目の前で轢かれそうな女の子がいたらどうする？……そりゃあ助けるよね!!

僕は女の子を押し、眩い車のライトに照らされて僕の意識は途絶えた。

◆◆

目を開けて視界に入ってきたのは白い天井。

「……　ん？　ここはどこだ？　病院か？　助かったのか？　それにあの女の子は……」

無限に疑問が湧いてくる。

「その質問に答えよう」

どこからか、そんな中性的な声が聞こえてくる。

「誰だ!!」

急いで僕はその方向を見る。そしてそこに居たのは、ＹｏｕＴｕｂｅを観てる《なに

か》だった……　もう一度言う男でも女でも人かどうかも分からないなぞの生物がＹｏｕＴｕｂｅ観ながら語りかけてきた。

「……　え？」

流石の僕もこれには困惑する。てか困惑しない方がおかしい状況だ。

「あー自己紹介がまだだったね？　　僕はこの世界の神だよ」

「……　は？」

顔は分からないが、おそらくドヤ顔でその言葉を発した自称神その言葉にさらに僕の困惑は深まった。

「いやいやいや、神って!?　本当にどういうことですか!?　ていうか神様だとしたらここは？」

僕は自称神に早口で捲し立てる様に聞いた。

「君のさっきまでの質問に一つ一つ答えよう。　まずここは死後の世界で君は間違いなくトラックに轢かれて死んだ。　けど女の子は助かったから安心していいよ。　しかし真っ先に女の子の心配をするなんて君は本当に善人だね!!」

「やっぱり……　死んじゃったのか。でも女の子が生きているならまあ命を懸けた甲斐があったかな？」

僕は女の子が生きているという事実に安堵し、自然とこの状況に納得してしまった。

「ふふふ……　本当にいい子だね。　じゃあ転生しよっか？」
「は？　はぁーーー？」
　てんせい？　転生!?　何言っているんだこの神は！
「ふふふ……　驚いてるね。　僕はＶＴｕｂｅｒが好きなんだけど、神様だからその人の中身まで見えてしまって推せないんだ……　だから君いや悠哉くんみたいな善人になって欲しいんだ。ダメかな？」
　――いやそれは普通に神様が動画を見るということ自体ないから仕方ないんじゃないのか？
　そんなことが頭をよぎったが、悲しそうに話す神様に少し同情してしまった。そして
「いいですよ。　けど僕何も出来ないし、転生するといってもＶＴｕｂｅｒとか見たことないから分からないし……　本当に大丈夫ですか？」
　そんなことを言ってしまった。
「そこら辺は安心して欲しい。　別に初めてのＶＴｕｂｅｒになって欲しい訳では無いんだ。　ただみんなに慕われるようなすごいＶＴｕｂｅｒになって欲しい。　そのためにみんな大好き転生特典でＶＴｕｂｅｒの配信が全て分かるタブレットと声帯を好きに変えることができるようにしておくよ。」

なるほどサービスは完璧ということか。　とりあえず最初は動画を見ることから始めるか。

「わかりましたありがとうございます！　」

「では、転生してもらうよ！　んぁ言い忘れてたけど転生後の性別は女の子だよ。　TS転生ってやつだね」

「えええええええええええええ!!!!!　最後の最後に爆弾置きやがったあの神様!!!」

そんな叫び声とともに中吉悠哉は転生した。

始まり
転生

神様に騙されたあの日から長い年月がたって、今はもう高校生2年生になった。
それまでに色々あったけどね……　まぁそれは後で話そう。
この世界での僕は四季夏咲（しきなつみ）という名前で四季家の長女だ。
見た目は元々男だったから長い髪が邪魔で、ショートにしていて胸も晒しを巻いている。　顔とかは男とも女とも取れる顔で、あんまり女の子扱いはされないかな。
そして今は中学生からの親友東雲（しのめ）　響子（きょうこ）と登校している。響子の見た目は黒髪ロングで眼鏡をかけていて体型は巨乳で全身ぷにぷにしていて可愛い系だ。性格は少し毒舌でツンツンしている。
「響子は今日も可愛いね!!」
僕が元気よく響子にそう言う。　昔は色々あったが今は軽口を叩けるくらい仲良くなれて良かった。
「そう、貴方は今日も馬鹿みたいに元気ね」
うん！　相変わらずの毒舌!!!　けど少し顔が赤い？

「ん？　顔が赤いけど、どうしたの？　具合悪い？」
心配して思わず口に出てしまった。
「いつもこんな感じでしょ。　というか今日テストよ、勉強してきたのかしら？」
都合が悪かったのか話を変えれた気がする……　って、テスト!?
「はっ!!　忘れてた……　まぁ僕賢いし大丈夫でしょ」
まぁ、一応前世はいい大学に行っていたし高校生のテストは大丈夫だ。
「本当になんでそんなに馬鹿みたいなのに、頭がいいのよ」
ちょっとズルしてるみたいだけど、神様のせいだし仕方ないよね。

……　え？　ＶＴｕｂｅｒはどうしたのかって？
そこは僕も気になっていて神様が言っていたタブレットはどこにもなくて
そもそもＶＴｕｂｅｒという存在がまだ出ていないんだ。
まぁ、そのうち来るでしょ。　そんな風に思いながら今は、２度目の学校生活を謳歌するよ。　……　まぁ、友達は響子しかいないけど
◆◆
放課後みんなは何をする？　僕はもちろん部活だ。部活は学生の醍醐味でもあるからね。　そして僕が所属しているのが手芸部。お裁縫をする部活だ。

……　まぁ４人しかいないんだけどね。

そして今は後輩にのしかかられている。　こののしかかってきてる後輩は、十鳥結心（とっとりゆうと）極度の女の子嫌いで、イケメンで俳優をやっていてもおかしくない容姿だ。　女の子嫌いだけど部活の人なら大丈夫らしい。

「重いんだけど……」

僕が少し怒りながらそう言うと

「えっ？　先輩いたの気づかなかった！」

と少し馬鹿にした感じで言ってきた。　僕の身長は１６２ｃｍと女子高生だったら普通くらいの身長だが、結心が高すぎる所為で、結構舐められている。

「ちょっと結心くん!!　夏咲先輩に失礼なこと言っちゃいけないッスよ!!」

今結心に怒っているのはもう1人の後輩の天巻歌凛（てんまきかりん）語尾に「ッス」が付いていて私を慕ってくれている。　見た目はロングで、

胸は……　まぁ、可愛い後輩だ。

そしてこうなると自然と2人の口論になる。　いつもはその口論を止める先輩がいるのだか今日は前々から休むと言っていて今日は居ない。　だから今日は僕が口論が発展するまえに、止めなきゃいけない。

「僕はもう大丈夫だから、部活しようよ」

「駄目ッスよ、今日という今日は絶対に結心に夏咲先輩に対して謝罪してもらいますからね」
「えー先輩も良いって言ってるし部活しようよ～」
◆◆
まさか今日口論だけで部活が終わるとは……　とりあえず帰ろう。
そんなこんなで今日も長い一日を終えるはずだった。
「ん？　僕宛てに宅配便？　なにこれタブレット？　タブレットだーー」
僕の一日はまだ終わらなそうだ
◆◆
～神視点～
「んー！　まさか彼の周りにいる子達全員あの世界のＶＴｕｂｅｒをささえる子達じゃないか？　やっぱり彼……　彼女は持っているね」

先輩!?

「タブレット!?　このタイミングで来るの!?」

僕は神様がもう忘れてると思っていたタブレットの登場で、動揺して叫んでしまった。　そしたら近所の人に、死ぬほど冷たい目で見られたので逃げるように家に入った。

「ただいまぁー」

と言ったのはいいが少し早く部活を切り上げてきたから、家族は居ない。

――さっきの咆哮聞かれなくてよかった……

そんなことを思いながら2階の自分の部屋に戻り、制服を掛けてベッドの上で、タブレットをよく見てみることにした。

「すごい!!　このタブレット僕がいた時代の最新機種だ!!　んー?　でもこの時代ではまだ発売されてないから、見つかったらまずいのでは?　まぁ神様のことだし大丈夫だよね」

そんなことを言いながら僕はタブレットを起動した。　すると

「　起動者確認……　肉体、精神、神力……　完全一致　四季夏咲の確率１０

０％　　ロックを解除します。」

そんな機械的な声が聞こえてきた。

「えっ!?　何何何?」

いきなり声が聞こえてきて、僕はまた叫んでしまった。　明日ご近所さんにキン肉バスターされるかもしれない……

そんなことを思いながら画面を見てみると、アニメに居そうな金髪ロングの制服を着たキャラクターが喋っていた。

「こんにちは四季夏咲様。私は、四季夏咲様のＶＴｕｂｅｒ活動をサポートするために神様に造られたＡＩです。　名前はお好きなようにお呼びください」

……　また面倒臭いことになりそうだ。　けどＶＴｕｂｅｒ活動をサポートしてくれるのは正直、右も左も分からない状況だから嬉しいな。

「ありがとう。　正直よく分からないけど、頼りにしてるよ!　アイちゃん!」

「はい。ありがとうございます。ところでアイちゃんとは?」

「ＡＩだからアイちゃん!　ダメかな?」

我ながら安直なネーミングセンスだと思う。　けど名前が無いのも不便だ。　気に入ってくれるかな?

「安直だと思いますが。　ありがとうございます。」

淡々としてるが顔はとてもニコニコしている。　かわいい。　これを見る限り意外と感情はあるのかな？

「気に入ってもらってこっちも嬉しいよ。　けどなんで今タブレットが？」

「それは、今日が初めて日本でＶＴｕｂｅｒの動画が配信される日だからです」

「おー今日なんだ。　なるほどねだからか……」

多分だけど神様はＶＴｕｂｅｒのことが分からない僕のために、今日タブレットをくれたのかな。　ちょっと嬉しいな。

「はい。　それで早速その動画を……」

アイちゃんの動きがいきなり止まった

「どうしたの？　アイちゃん」

「神様からメッセージが来ました」

「えっ！　神様からメッセージ来るんだね！　それでなんて言ってるの？」

神様からメッセージ来るのか……　これなら神様に文句を言えるのでは？

そんなことを考えながらアイちゃんの返事を待つ。　少し文章を読み取るのに時間がかかっているようだ。

「読み取り終わりました。では読み上げます。

やぁ、神様だよ。　今日はそのタブレットの説明をするよ。　そのタブレットはＶＴ

ｕｂｅｒのことならなんでも分かるタブレットで、ＶＴｕｂｅｒの動画が始まったら自動で君がいたら点いて、いなかったら録画されるよ。　あと可愛いＡＩを付けておいたから、仲良くしてね。　他には……　あっそうだ、今日来る日本で初めてのＶＴｕｂｅｒは快晴（かいせい）日中（はる）の人は花菜（かさい）　時音（しおん）。君のひとつ上の歳だからもしかしたら出会うかもね。　じゃあまたね」

なるほどね……　すごい便利なタブレットなんだなぁ。　花菜時音ね……

なんか……　今日休んだ花菜時音とか言う先輩いたなぁ

「どうしたんですか？　夏咲様」

アイちゃんが黙っている僕を心配してくれている。　しかしそれは僕はそれどころじゃない。

「先輩いいいいいいいいい!?」

日本初のＶＴｕｂｅｒは先輩でした。

笑顔

「先輩が日本で初めてのＶＴｕｂｅｒ!?」
「はい。　そのようですね」
　僕が驚いたようにそう言うと、アイちゃんは淡々と応えた。
「いや、でもなんか僕がちょっと見たことある奴は、フィギュアみたいなのが動いていたけどそれって一人で出来るの？　あとその人自分のことＶＴｕｂｅｒじゃなくて、バーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒって言ってたけど。」
　僕も流石にテレビなどは見る。　そしてそこに世界で初めてのバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒが出てきた時があり、凄い技術だったから先輩一人で出来るのかな？
「まず一人で出来るの？　という疑問については、出来ないこともないですが、大体は企業から機材などを借りたり、自分の見た目をイラストレーターに描いてもらったりします」
「へー。　結構ちゃんとしているんだね　」
「はい。　今回の花菜時音さんの場合だと、３Ｄメイキングという会社のオーディションに合格して吾妻（あずま）　ヒビキ（ひびき）というイラストレーターに体を描いてもらい、３Ｄメイキン

グに機材を借りてますね」
「オーディションなんてあるんだ。　じゃあＶＴｕｂｅｒとバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒの違いは？」
　なるほど、オーディションか確かに企業勢とか聞いた事あるし、神様にＶＴｕｂｅｒになれって言われたけど企業勢になればいいのかな？
　まぁそれは、後で神様に聞けばいいか。
「違いはほとんどありません」
「えっ!!　無いの!?」
「はい。　無いです。　強いて言うならＶＴｕｂｅｒはバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒの略語ですね。　そしてもうライブの１分前です。　今度こそ移動します」
　そうアイちゃんが言うと、タブレットの画面が勝手に動き始めた。
　どうやら、説明を聞いてるうちに時間が結構経ってしまったようだ。
　それにしても、先輩はどんな配信をするのだろうか。　意外と初対面の人とかには静かだから、最初は声がちいさいだろうし音量を上げとこう。
「アイちゃん、音量を上げて」
「はい。　音量をＭＡＸにしました」
Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ

そこには何も無い。　ただ一人の儚げな少女の後ろ姿が見える。
声を掛けなければその場所から立ち去ってしまいそうな感じで、僕は思わず声が出てしまった。
「あ……」
「……？　どうしました夏咲様」
しかし、そんな僕の感じた雰囲気の真逆の笑顔で彼女は振り返り、大きく息を吸った。
僕は嫌な予感が来て僕は、反射で言った。
「アイちゃん、音量を下げ……」
「この地球の全てのものにこんにちわ!!　」
「みんなに笑顔を与える太陽!!　快晴　日です!!　よろしくお願いします!!」

これが伝説の始まり... だといいな

ハキハキとした声で配信は進んでいく。　そして僕は転生前から知っていたということもあり、あまり驚いてはいない。　というか耳が痛すぎてそれどころではないのだが、コメント欄は違う。

約５０００人位の視聴者が次々に疑問をコメントしていく。

コメント

・３Ｄモデル？

・録音？

・ＭＭＤみたいな感じか

「違いますよ～　私はそうですね……名付けるとしたら仮想世界（バーチャル）の配信者（ＹｏｕＴｕｂｅｒ）てバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒとでも名乗っておきましょう」

コメント

・なかなかいいんじゃない

・つまり人間がロボットみたいに動かしているってこと？

・多分そう

・俺は可愛ければ何でもいいぜ

「あと、これからの配信だけど……　実は何も思い浮かんでないからその日のノリで決めるね!!　まぁ、バーチャルならではのことをしたいかな!!」

コメント

・草ｗｗｗ

・草に草を生やすな（戒め）

・まじか

・例えばどんなの？

・てか声がめちゃくちゃ部活の先輩に似てる

「例えば……　体を動かすゲームとか～　あとは私二重跳びが出来ないからさ、それを出来るようにするとか」

コメント

・本当にバーチャルならではのことをしてる

・二重跳びできないの可愛い

・なるほどね

・身体測定とかしよ

・下心丸出しで草

「まだみんなと話してたいけど、自己紹介はできたし、日も沈んできたから終わりにするね」

コメント

・まだ、４時やで

・行かないで

・バーチャル世界日が短いからなぁ（適当）

・また日が昇ったらやるでしょ

「その通り！　別に最後の別れって訳じゃないから、待っててね!!　んじゃあめ～

……噛んだ」

コメント

・噛んだｗｗｗ

・んじゃあめ～

・んじゃあめ～

・新しい楽しみができたなぁ

「終わりましたね」

「うん．　まだ耳が痛い」

「画面の中にいる私にまで響いてきましたからね」

「バーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒか……」

　きっと、先輩の中でなんと名乗るかは決めていたのだろう。　そして、先輩から始まるのだろうバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒというのは。　言うなれば。

「伝説の始まりってやつかな？」

「そうですね。　しかし、貴方の始まりでもあるんですよ。　夏咲様」

「神様との約束があるしね……これ、僕にできるかなぁ」

　そう、僕は神様との約束でＶＴｕｂｅｒにならなくちゃいけない。けど、先輩の配信を見ていると本当にできるのかあやしくなってくる。

　本当にキラキラしていて、かっこいい……　うー、本当に不安になってきた。

「大丈夫てず。　夏咲様には才能があるので」

　僕が悩んだ顔をしていると、アイちゃんの声が後ろから聞こえた。

　……後ろから？

「……えっ!?　」

　僕が思い切り後ろを振り向くと、さっきまで画面に映っていたアイちゃんがいた。

　どうやら、少し目が疲れているようだ。　僕は目を擦り、もう一度振り向いた。

「だから、大丈夫ですよ夏咲様。　そんな心配そうな顔しなくても」
　そしたら今度は、僕の肩に手を乗せて諭すように話すアイちゃんがいた。
「ありがと……う？」
「どうしたのですか？　夏咲様？」
「いやいやいや、えっ？　さっきまで画面にいたよね!?　ＡＩみたいな感じで！　何!?　どういうこと!?」
「私は神様に創られた存在です。　このくらい簡単にできます」
　アイちゃんは可愛いドヤ顔で言った。　そして僕は思った。
　――神様ってなんでもありだな
「仕組みはわかったよ。　けど、家族にどうやって説明すれば……」
「そこら辺は私に任せてください」
　まぁ、意外と今の僕の親は放任主義だし、大丈夫かな……。
「わかったよ。　これからよろしくね」
「はい。　よろしくお願いします」
　今日はバーチャルＹｏｕＴｕｂｅｒが産声を上げた日。　きっと、彼女たちは伝説になるのだろう。　しかし、彼女たちがそれを知るのはまだ先になりそうだ。
―